庶務幹事この一年

松井文彦（分子科学研究所）

昨年の夏に横山会長から庶務幹事の打診がありました。突然の大役に驚き，横山さんに会長選で一票投じたのをちょっぴり後悔しましたが，「庶務幹事は会長の番頭，ぜひ頼みたい」と声をかけていただけたのはやはり嬉しくお引き受けいたしました。ちょうど番頭が脇役の時代小説を読み続けていたところで，何かしら自分でもお役に立てることがあるのでは，と思っていましたが，これは私の勘違いだったかもしれません。前会長の朝倉先生が取りまとめているデータ構造化諮問委員会では，各施設・各手法の専門家の皆さんからの議論・提案を勉強させていただいています。学会の４つ目の賞である「高良・佐々木賞」の創設においては，表彰を通じてコミュニティーの質を高めたいとする熱意を知る機会になりました。こちらが「役立つ」よりも「頂いている」ものの方がはるかに大きかったというのがこの一年の実感のところです。私の至らないところを毎度サポートしていただいている事務局の佐藤亜己奈さんにただただ感謝です。

３年ごとに募集のある学術会議のマスタープランが「未来の学術振興構想」に衣替えしました。目下，この「構想」への応募に向け，横山会長と各施設関係者の皆さんからの意見を伺ったり，幹事の皆さんと議論を深めたり，といった準備作業に参加させていただいています。またコロナ禍で延期になった放射光60周年記念事業は2023年秋に分子研を会場として行うことが決まりました。幹事の任期も折り返し，後半戦はさらに重要な議題が続きそうです。これまで20人の方が庶務幹事を務めてこられました。少しでも学会に恩返しして22代目の方に庶務幹事を引継ぎができたら，と思います。引き続きどうぞよろしくお願いします。

例の時代小説は47巻目に突入，こちらは大団円を迎えそうな気配が出てきました。次の会長がどなたを番頭に選ぶか，楽しみでもあります。

行事幹事この一年

阿部　仁（KEK 物質構造科学研究所/茨城大学）

前任の小嗣真人先生（東京理科大学）から行事幹事を引き継ぎ，行事委員には11名の方にお願いして行事委員会を組織しました。“行事”とつくので，イベント関連を担当するのだろうと漠然と思っていましたが，年会・放射光科学合同シンポジウムの組織委員長の役割には，動き出してから驚きの連続でした。現地実行委員会が開催の実働を担ってくださるのですが，その成り立ちから，実行委員会，組織委員会，プログラム委員会，また各共催団体との関係，など勉強することがたくさんありました。理解が浅く，多くの先生方，そして事務局の方にご迷惑をかけながら学ぶ一年でした。

また，ちょうど今，若手研究会が仙台で開催され，来週には基礎講習会が開催されるタイミングでこの原稿を書いています。頼れる行事委員に恵まれたことに感謝しているところです。この２つと年会・放射光科学合同シンポジウムと合わせて３つの行事が例年の行事幹事の担当となっていますが，来年はさらにもう一つイベントがあるかも !?　お楽しみに。

COVID-19以降，イベント開催は世論の動向も含めて感染状況に大きく依存しています。少しずつ現地（対面）開催が増えてきていますが，まだまだオンライン開催とならざるを得ないものも少なくありません。最初の頃は「移動時間なしに参加できるオンラインは良い」と言っていたものの，最近は「オンラインはもう嫌だ」という声も多く聞かれます。対面開催にもオンライン開催にも良い点があり，今後はイベントの目的等によって使い分けられていくように思います。学会への参加は，単に成果発表を行うだけでなく，学会という場を通して新しい芽を見つけられることも醍醐味と思います。休憩時間などに発表会場以外の場で深い議論をしたり，偶然の出会いをしたり，何となく知り合いになったり，このような積み重ねが“次”を産むように思います。学生の頃には，憧れの先生や研究者に突

(C) 2022 The Japanese Society for Synchrotron Radiation Research

撃し，不躾にも自分のポスターのA4印刷版を押しつけ，話を聞いて頂いたこともありました。そんなことができる状況に早くなって欲しいと思います。

さて，そろそろJSR2023の時期です。立命館大学の先生方を中心に，開催に向けて準備を進めています。皆様，ぜひ充実の年会・放射光科学合同シンポジウムをお過ごしくださいませ。

編集幹事この一年

若林裕助（東北大学）

2021年10月より，前任の関山先生（阪大）から編集幹事を引き継ぎました。20名ほどの編集委員，事務局の佐藤さんと共に学会誌の編集業務を行っています。編集委員は任期2年，1年毎に半数が入れ替わる形で，継続的な会誌編集業務にあたっています。

私は10年ほど前にも編集委員を務めました。当時と比べ，大筋において編集委員の業務は変わっていないのですが，若干の変化もあります。編集委員会がオンライン化された事の他に，多くの記事提案の採否が年3回の編集委員会ではなく，随時行われるメール審議で決まるようになった事が大きな違いです。これによって多少，記事提案から掲載までの時間が短縮されたはずです。とはいえ，実際には執筆開始から掲載まで半年近くかかりますので，大幅な高速化は原理的に困難です。

34巻6号から35巻5号までの1年間は，色々なタイミングが重なって特集号が多く刊行されました。34巻6号は日本中性子科学会，日本中間子科学会との合同特集号「協奏的量子ビーム研究の最前線 ―蓄電池・ソフトマター―」。35巻3号は「表面反応観察における大気圧光電子分光の現状，利用研究と展望」。35巻5号は「放射光を用いたガラス研究の最近の進展～国際ガラス年2022を記念して～」。企画開始から掲載までには1年以上かかるのが普通です。2022年を国際ガラス年とすることが国連で決まったのが2021年5月で，その頃には大気圧光電子分光の特集企画が動き始めていました。ガラス特集は2023年に回せませんので，一般の記事の掲載を前後にずらして対応することになりました。

会誌は執筆依頼が来た人が書くもの，と思われているかもしれませんが，そうではありません。放射光学会ホームページに，「学会誌について」というページがあり，会誌投稿・執筆規定がpdfで置かれています。そこに，「会員は以下の規程に従って自由に投稿することができる。」「投稿者は日本放射光学会の会員に限る。ただし，編集委員会が執筆を依頼する場合には会員に限らない。」という条文があり，実は投稿記事が基本であるようです。特に35巻5号に久しぶりに掲載された新博士紹介の欄は，投稿に頼らざるを得ません。誰が放射光を用いて学位を取ったか，編集委員が知る術が無いためです。博士の審査が終わったら，是非（入会いただいた上で）学会誌に自己紹介の文章を書くようお願いします。

渉外幹事この一年

熊坂　崇（高輝度光科学研究センター）

2021年10月1日から渉外幹事に就任して一年が経ちました。引継ぎの際には前任の中村哲也先生(東北大学)に，その後の実務においては事務局の佐藤亜己奈さんに大変お世話になっております。お陰様で，この職務を進めることができており，大変感謝しております。

渉外幹事の活動としては関連する学会・機関等との連携と会員の皆様への情報発信が主たる職務となります。引継ぎ以来コロナ禍の只中にあり，対面でのイベントとくに国際会議の開催に制限がありましたが，仙台で開催予定だったAO-SRIの準備が再開され，この原稿が掲載されるころには無事終会しているものと思います。このように落ち着きを取り戻しつつあるとはいえ，当初の混乱のなかでも会員や他学会・機関のみなさんがオンライン会議などを駆使されたことで活動は維持され，こうしたイベントを含め200件程度の各種案内の確認と情報発信を行ってきました。

ところで，こうしたコロナ禍に後押しされるように放射光実験のDX化も進んできていますが，測定試料の輸送について，ドライシッパーと称する低温輸送容器の荷扱

が，幹事就任とほぼ同時期に一部の宅配便業者で停止される事態になりました。他学会等と足並みを揃え，利用者に正しい容器の使用法を周知し，連携した情報収集や対応を行うことで，お陰様でその混乱は一旦収束させることができました。引き続き関係者との調整を続けています。

また，男女共同参画への取り組みにも変化が生じています。この業務は渉外幹事の担当で，男女共同参画学協会連絡会への参加や情報収集とその展開がこれまでの主な活動でしたが，来秋にはこの会における当学会の資格がオブザーバー会員から正式会員へ移行することが決まっております。このために渉外委員会を再開して体制を整え，男女共同参画への取り組みを強化していくことが評議員会で認められました。本件に関しては学会毎に取り組み方もさまざまです。是非みなさまのご意見をお寄せ下さい。

末筆ではございますが，残り１年間の任期につきましても，関連学会・機関との連携を進め，会員の皆様に役立つ情報を発信していく所存です。引き続き御指導，御協力のほど何卒宜しくお願い致します。

会計幹事この一年

岡島敏浩（あいちシンクロトロン光センター）

2021年10月１日に，前任の高橋先生（東京大）から会計幹事の引継ぎを受けて，早いものでもう１年が過ぎました。これまで会計の仕事に携わったことはありませんでしたが，会長の横山先生（分子研）を始め他の幹事の先生方，並びに学会事務局の方々にご指導をいただきながら，何とか職務をやって来れました。大変ありがとうございます。

皆様もご存じのように，2020年春に始まったCOVID-19のパンデミックの影響は2021年度も引き続き，この期間多くの経済活動が中断され，当学会の活動も例外ではありませんでした。合同シンポジウムや若手研究会，そして基礎講習会など，学会の主要な活動がリモートでの開催となりました。また，幹事会，評議員会などの会議も全てリモートでの開催となりました。また，2019年にAOFSRRスクールに若手研究者を派遣することを想定して設立された「大学院生の国際活動支援奨学金」は，2022年度はスクール自身が開催されることがなかったため，これら活動に充てていた予算が使われずに残ることになりました。一方，2021年度から始まった学生会員の会費無料化については，学生の学業支援や退会防止のために2022年度も引き続き行うこととしました。学会会計は，このような中でも毎年の余剰金が積み上げられ，多くの繰越金が蓄積されている状況にあります。このこと自身は，学会の安定運営や不測の事態への備えとしては良いのです。しかし一方で会員の満足度を上げることで退会者を防いだり，将来に向けた投資や会員増への取組みを行ったりなどの有効な活用法を考える必要があります。今後，幹事会や評議員会などで議論していきたいと思いますので，ご意見をお寄せください。

会計の仕事も半分が過ぎ，残り１年の任期ですが，学会の会計を確実に行っていきたいと思いますので，引き続き会員の皆様のご指導とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

広報幹事この一年

和達大樹（兵庫県立大学）

2020年４月１日に広報幹事に就任してから２年半が経ちました。新型コロナウイルスの問題が始まった時期であったこともあり，Withコロナ時代において放射光学会の活動を会員のみでなく世間に分かりやすく伝えるような活動を行っています。

まずは，「リモート測定に向けた試料準備」のホームページ（http://www.jssrr.jp/試料準備/試料準備.html）を作成しました。各放射光施設において試みが行われ始めているリモート測定にあたり，ユーザーがどのような試料準備を行えばよいかをまとめました。これは，新たに測定装置を建設する際にも参考になると考えられますし，試料ホルダーの統一化などにも貢献できると考えています。

昨年度には会員マイページシステム「SMOOSY」を導入しました。会員の皆様ご自身がマイページで請求書・領

収書のPDFをダウンロードできるようになり，ペーパレス化が実現しました。また，会費の入金確認もできるようになるなど，多くのメリットを感じていただけたと思います。年会の参加登録との連動が現状の課題です。学会ホームページについても，全面的な改訂を行っている最中です。最近の放射光科学の大きな流れを発信すること，周辺分野との積極的なコミュニケーションを図ること，会員間の交流，特に賛助会員と学会員の交流を促進すること，などを目指します。

そして，若手部会の活性化も重要な活動と考えています。昨年度は若手有志による研究会をオンラインで開催しました。このような研究会の開催に加え，若手部会メンバーによる若手研究会の提案や，表面真空学会若手部会など他団体との交流・協力をさらに推し進めたいと思っています。

以上のような目標のもと，残り1年の任期で学会の広報のために活動したいと考えておりますので，会員の皆様のご指導，ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

学会賞幹事この一年

木下豊彦（高輝度光科学研究センター）

横山会長を中心とした学会執行部が発足するにあたり，新たに学会賞幹事を設けるのでぜひ引き受けていただきたいとの依頼を受けた。学会にはすでに，放射光科学賞，奨励賞，功労報賞の3つの賞が存在していたが，初代，および2代目の会長であった高良和武先生，佐々木泰三先生がその前の年までに逝去されていたことで，両先生のお名前を冠した賞ができないか，という議論が評議員会でなされていた。朝倉前会長の任期中には，この賞の制定に関しての決定をすることができず，横山体制への引継ぎ事項として宿題となっていた案件であった。

私自身は，評議員会でこの間の議論に参加しており，経緯も承知していたが，まさか幹事としてその取りまとめをすることになるとは予想しておらず，そもそも，幹事というポストが設置されることも予想していなかった。特別委員会か何かで議論されるのかな，という思いであった。ところが，横山会長だけでなく，朝倉前会長からも幹事として設置したいのでよろしくという話をされた。いろいろお話をさせているうちに，議論の成り行き次第で，実際に賞を設定し，表彰に至るまでには2年程度かかる可能性もあること，今回の議論以外の学会賞に係る事項への対応もありうること，などで，幹事としての必要性を納得し，任を受けさせていただくことにした。

2021年10月に新しい執行部が発足し，早速幹事会で新しい賞の方向性についての議論を始めた。歴代の会長にご意見を伺いつつ，それまで評議員会で行われた議論を踏まえ，様々な意見交換を行った。評議員会でも引き続き議論を行っていただき，何度か方向性の修正が行われた。議論の中では，対象となる分野，年齢などに関し，様々な意見が出されたが，最終的には予想以上のスピードで，2022年1月6日の評議員会で，高良・佐々木賞としての設置が制定された。また，賞募集へ向けての具体的なアクションとしての内規も4月9日の評議員会で認められた。

さて本稿を執筆している現在，4賞の公募に対し，それぞれ応募があり，審査が進められている。最初はどうなるのか，うまくまとまるのか不安ではあったが，順調に始まり，ほっとしているところである。会長はじめ，他の幹事の皆様や評議員の皆様の建設的なご議論に感謝申し上げたい。場合によっては2年かかると思っていた幹事の仕事も，ほぼ道筋がついてしまったが，あと1年任期が残っている。今後，幹事会メンバーとして，放射光利用60周年の記念行事など，できるだけ協力していきたいと思っている。